

「スイス PER」における「倫理と宗教文化」教育の現状と課題

田中マリア（筑波大学）

細戸一佳（帝京大学）

ミカエル・デルヴロワ（東京大学非常勤講師）

はじめに

本研究は、これまで教育学の分野ではほとんど解明されてこなかったスイスの価値教育について、今日の義務教育制度統一化の動きのなかで積極的に教育改革をリードしている「スイスフランス語圏における教育計画（Plan d'études romand）」（以下、「スイス PER」）に着目し、なかでも価値教育と関連の深い「倫理と宗教文化（Éthique et cultures religieuses）」教育に焦点をあて、その現状と課題について解明することを目的とするものである。

近年、グローバル化の進む国際社会のなかで、先進諸国における価値教育の優先課題のひとつに、「世界市民（Cosmopolitan Citizenship）」の育成を挙げることができる¹。日本でも「シティズンシップ教育」に対する関心は年々高まってきているが²、これまで先行事例として研究されてきた国々をみても、スイスに着目した研究はほぼ皆無である³。スイスは周知のごとく、州によって法律も制度も言語さえも異なる連邦制国家であり、ひとつの共通した枠組みのなかで論じること自体が難しく、そのことに起因してか、これまで教育学の分野でもほとんど研究されることがなかった⁴。しかしながら、そのスイスも2006年の国民投票以降、「義務教育学校における協調に関する州間協定（l'Accord intercantonal sur l'harmonisation de la scolarité obligatoire）」（以下、「HarmoS 協定」）の策定をはじめ、統一的な動きをみせるようになってきた。そこで今日、ようやく、スイスにおける教育改革の動向把握・実態解明に着手する動きも見られるようになってきたところである⁵。ただし、これらの研究はもっぱら教育制度的な関心、とりわけ幼児教育義務化の動向との関連において検討がなされているものであり、価値教育の動向やその詳細を解明するところまでは至っていない。とくに、スイスでは「市民性の教育（Éducation à la citoyenneté）」と同様に「倫理と宗教文化」に関する教育も置かれているものの、倫理宗教文化教育に関する動向まで射程におきながらスイスの価値教育について解明している研究は管見の限り見当たらない⁶。

そこで、本稿では、今日スイスの教育改革をリードしているフランス語圏において推進されている「スイス PER」の「倫理と宗教文化」教育の現状と課題の考察を通して、今日のス

イスにおける「倫理と宗教文化」教育に関する動向について、その一端を明らかにしようとするものである。この目的を達成するために以下の手順で論を進める。まず、「スイス PER」における「倫理と宗教文化」のプログラム上の位置づけとねらいについて確認する。次に、「倫理と宗教文化」を通して取り扱われるべき事柄や学習内容等について、段階ごとの到達課題を明確にした上で、それぞれの段階に用意されている教材とその特徴について明らかにする。その際、とくに使用教材に関しては詳細を把握するため、「スイスフランス語圏およびテッサンの義務教育に関する州間委員会（Conférence intercantonale de l'instruction publique de la Suisse romande et du Tessin）」（以下、「CIIP」）を通じて活用が推奨されている児童生徒用教材に着目するだけでなく、これまで長期に渡り、フランス語圏において倫理や宗教教育用の教材開発に努め、「スイス PER」の「倫理と宗教文化」用の教材についてもフランス語圏のほとんどの州で教材を提供してきた実績をもつアゴラ出版（元エンビロ出版）へのインタビュー結果⁷も踏まえて概観する。最後に、それまで明確にしてきたことを踏まえ、またアゴラ出版へのインタビューや幼小中高への学校訪問⁸を通して得た情報等にも依拠しながら、「スイス PER」における「倫理と宗教文化」教育の現状と課題について考察する。

1、「スイス PER」における「倫理と宗教文化」の位置づけとねらい

（1）位置づけ

「スイス PER」では、CIIPの「包括的な教育計画（Projet global de formation）」に対応して教育を複合的な視点からとらえ直し、それぞれの「サイクル（Cycle）」に対応させるかたちで、各教育内容を段階的に発展させていくようコーディネートしている。サイクル1は1年-4年（4歳-8歳）、サイクル2は5年-8年（8歳から12歳）、サイクル3は9年-11年（12歳-15歳）となっており、この区分は「HarmoS協定」（第5条）に記述されている義務教育の枠組みを包含している⁹。「スイス PER」の教育計画は具体的に、次のような「原理的な5つの領域（Domaines disciplinaires）」¹⁰、「総合的な教育（Formation générale）」、「横断的能力（Capacités transversales）」という三側面から構成されている。

【原理的な5つの領域】言語：（フランス語、ドイツ語、英語）、数学と自然科学（数学、自然科学）、人文社会科学：（地理、歴史、市民性への教育、倫理と宗教文化）、芸術：（クリエイティブアートと工芸、ビジュアルアート、音楽）、身体と運動：（体育、栄養教育）

<p>【総合的な教育】MITIC (メディア・インターネット・情報技術・通信)、健康・幸福感、個人の計画や選択、共に生きる・民主主義の実践、相互依存関係 (社会・経済・環境)、アイデンティティ</p>
--

<p>【横断的能力】協同、コミュニケーション、学習能力開発、創造力、分析的手法</p>

(「スイス PER の概念図」により筆者、作成)

「倫理と宗教文化」は各州の裁量で設置の有無を決めることになっており、設置する場合には「原理的な 5 つの領域」の「人文社会科学」のひとつに含まれる。「倫理と宗教文化」を設置する場合、その科目の名称については特に指定はなく、州によって、例えば、「宗教文化 (Culture religieuse)」、「宗教史 (Histoire des religions)」、「倫理および宗教文化 (Éthique et cultures religieuses)」といった名称で置かれている。開設する時間数や実施の仕方も州によって異なっており、例えば、1 週間に 2 時間、歴史と地理の授業とは別枠で実施することになっている州もあれば、1 週間に 1 時間だけ行われる州もある。あるいは、まったく実施していないか、歴史や地理と同一枠内で、宗教についても少し触れる程度といった形で実施している州もある¹¹。

(2) ねらい

「スイス PER」の一環として「倫理と宗教文化」が行われる場合、そこで目指されるのは、大きくは CIIP によって示された以下のような目的、目標に準拠したものとなっている。すなわち、「公立学校は、児童生徒が自分自身の起源と他者の起源とを理解することができるように、また、彼らの住む社会において様々な伝統や多様な価値観が共存することのもつ意義を把握し、正しく認識できるように、宗教文化を含む文化的、歴史的、社会的基盤に関する知識について配慮し、アクセスできるようにする。」CIIP ではこのように述べて、公立学校において、「宗教文化を含む文化的、歴史的、社会的基盤に関する知識」について「配慮」したり、それらの「知識にアクセスできる」ようにしたりするのは、児童生徒が自らのあるいは他者の「起源」を理解したり、社会のなかにある「様々な伝統」や「多様な価値観」が「共存」することのもつ意義について把握したり、「正しく認識」できるようにするためであると説いている。

「スイス PER」には、「計画の概要 (Aperçu des contenus)」(以下、「概要」)が「Cycle」ごとに作成されており、「スイス PER」の構造や各領域のねらいなどが簡潔に示されているが、

この「概要」の中で、「倫理と宗教文化」設置の「意図 (Intentions)」に関しても、CIIPの目的、目標に準じて次のように説明されている。すなわち、「学生に多様な宗教文化の知識を提供すること」、「誰もが自分の起源を見つけられるようにすること」、「より複雑な間文化的および宗教的対話の文脈に自らの身を置くこと」、そして「実存的な問いに向き合うこと」である¹²。

「倫理と宗教文化」の時間は、「世界的な伝統宗教とヒューマニストについての事実に基づく知識と情報の場」¹³であり、「宗教的事実」についても、「それらは多様性の認識のなかで、また、ユダヤ-キリスト教時代に衰退させられた西洋社会創設時の文化的起源に関する仮説の点からも、とくにギリシアあるいはペルシアのルーツなどを忘れることなく扱われる」。そしてそれらは「歴史的、文化的な性質」をもつものとして扱われると説かれている。要するに、「倫理と宗教文化」では、通説以外の事実史なども「歴史的、文化的な性質」をもつものとして捉えつつ、多様な歴史認識を学ぶことが想定されているのであり、「多様な伝統」に関して、「その宗教あるいは知恵に関する信念、儀式、思考様式を厳密かつ客観的に提示すること」が目指されているのである。

さらに言えば、「倫理と宗教文化」は、児童生徒が「良心の自由」をもって、「自分自身の諸価値を知ること」、「それらの価値のもつ意義について省察すること」、「自分自身の倫理的価値を構築すること」、「他者の価値と信念を発見し尊重すること」、そして「倫理的責任感を発達させること」を学ぶ場であることにも言及されている。

このように、「倫理と宗教文化」は、「信仰 (foi) を深めることを目的とする護教的な宗教教育 (カテキズム) とは根本的に異なるもの」であること、それは、「生徒たちによってシェアされている信仰ではなく、個人、社会、世界における宗教的事象のあらわれに対する観察に基づく」ものであること、そうした「認識論的アプローチ」は、「布教および贖罪のいかなる形をも断固として拒否する」ものであることなどが明確にされている。そして、それらの意図に即しつつ、サイクルごとに掲げられている到達目標および学習方法は以下の通りである。

サイクル1 : 第1学年から第4学年 (4歳から8歳まで)
自己を他者に開放すること、その社会-宗教的文脈に自己を位置づけること
1...日々の中にある宗教的行いと文化の多様性を観察することによって、/2...自己と他者

<p>に対する敬意を育むことによって、／3...宗教的な物語、神話、伝説に浸らせることによって、／4...いくつかの実存的な問いを議論することによって、／5...いく人かの聖書上の重要な人物を学ぶことによって、</p>
<p>サイクル2：第5学年から第8学年（8歳から12歳まで）</p>
<p><u>宗教的およびヒューマニズム的な価値観に目覚め、宗教的事実を識別すること</u></p> <p>1...実存についての基本的な問いを立て、異なった宗教的潮流との接続を確立することによって、／2...基本的な倫理的原則を充当することによって、／3...主要な宗教の卓越した物語を知ることによって、／4...重要な人物を通して主要な宗教にアプローチすることによって、／5...主な宗教的儀式と宗教的に行いを知ることによって、／6...私たちの社会の宗教的景観を分析することによって、</p>
<p>サイクル3：第9学年から第11学年（12歳から15歳まで）</p>
<p><u>倫理的問題と宗教的事実を分析すること</u></p> <p>1...儀式、祝祭、芸術を通して宗教の多様な社会的表現を比較することによって、／2...倫理的省察を構築する能力を開発することによって、／3...イデオロギー的機能のメカニズムを識別することによって、／4...宗教的テキストを読むことができるコンテキストツールを取得することによって、／5...主な宗教の起源と進化を定義づけることによって、／6...実存に関する大きな問いを明確化し、異なった思考様式からの諸回答を比較することによって、</p>

(スイス PER 「概要」より、筆者作成)

「概要」には、以上の到達目標および学習方法に基づいて、さらに各サイクルにおける学習内容が詳細に示されている。そこで、次の節では「概要」で示されているサイクルごとの学習内容について参照しつつ、実際にそれに対応した形で開発され、活用が促進されている教材の特徴を概観していくこととする。

2、「倫理と宗教文化」の各サイクルにおける学習内容と教材の特徴

(1) 学習内容

「概要」では「倫理と宗教文化」で扱う学習内容が示されているが、各サイクルの終了までに児童生徒が学習しておくことが望まれる学習内容が以下のように定められている。

<p>サイクル1：第1学年から第4学年（4歳から8歳まで）</p>
<p>児童は、 3つの宗教（名前、礼拝所、神々、聖典）について、各固有の用語を関連付ける。／キリスト教の主な祝日（クリスマス、イースター）を引き合いに出す。／聖書の物語を聞き、話す。／イエスの生涯に関する何人かの登場人物やいくつかの場面に名称をつける。／サポート（絵画、人形など）を活用してたとえ話を話す。</p>
<p>サイクル2：第5学年から第8学年（8歳から12歳まで）</p>
<p>児童は、 十戒の10個の戒律を認識する。／クラス的生活（敬意、正義...）および社会（分かち合い、連帯、...）のいくつかのルールに関する正当性について説明する。／正義、分かち合い、自由、尊厳を価値として認識する。／アブラハムを3つの一神教に共通する人物として認識する。／聖書の中の何人かの登場人物の生涯におけるエピソードをたどる。／イエス・キリストの生涯における主要な段階（受胎告知、キリスト降誕、洗礼、受難など）をたどり、芸術作品においてそれらを理解する。／モーゼ、ムハンマド、シッダールタの生涯における主要な段階をたどる。／キリスト教における3つの主要な宗派やいくつかの重要な儀式を引き合いに出す。／宗教上の主な祝日の意味を説明する。／ユダヤ教とイスラム教のいくつかの祝日を引き合いに出す。／キリスト教徒の礼拝所といくつかの典礼のシンボル（十字架、魚（イクトゥス）、パン、ワイン）を見分ける。／主要な宗教（シナゴグ、寺院、教会、モスクなど）の礼拝所を認識する。／スイスの景観における重要な礼拝所を認知する。（ローザンヌ大聖堂、ジュネーヴ大聖堂、アインジーデルン修道院、ザンクトガレン修道院...）／テキスト、グラフィックス、地図、画像から情報を抽出し、スイスの宗教的景観に関する疑問を書きとめておくことができるようにする。</p>
<p>サイクル3：第9学年から第11学年（12歳から15歳まで）</p>
<p>生徒は、 カレンダー上にいくつかの宗教上の祝日を配置し、それぞれの意味を確認する。／主要な宗教に固有の儀式を識別する（入信の儀式、結婚式、葬儀、衣服、食べ物、...）／偉大な宗教的人物像とそのメッセージを認識する...（アブラハム、モーゼ、ダビデ、マリア、イエス、ムハンマド、シッダールタ、...）／トーラー、聖書、コーランを歴史的、地理的、宗教的文脈に位置付ける。／宗教的なテキストの象徴的な読みと文字通りの読みを区別</p>

する。／所与の状況の倫理的問題を、まったくの感情的なレベルを超えて説明し、評価する。／狂信や宗派主義につながる振る舞いを、客観的な基準から見分ける。／自由、運命、決定論の概念を区別する。／宗教あるいは哲学的文脈のどちらかにおいて、実存および来世の意味を説明する。

(スイス PER 「概要」より、筆者作成)

(2) 教材

本科目に検定教科書のような存在はなく、どのような教材を使用するかは州によって異なっている。スイスフランス語圏において、「倫理と宗教文化」に関する教材の開発、シェアの状況を調べてみたところ、ジュネーヴ州とヌーシャテル州を除くすべての州に教材を提供しているのがローザンヌに本社を構えるアゴラ出版(元エンビロ出版)であることが分かった。そこで以下、「倫理と宗教文化」に関する教材のうち、スイスフランス語圏の多くの州に提供されている主要な教材を中心に、教材の内容についてサイクルごとに概観する。その際、教材の内容だけでなく、教材の開発や編集方針などに関してアゴラ出版への聞き取りを通して明らかになった点などについても言及する。

1) 「サイクル1 (4歳から8歳まで)」

① 『レ・ゾフ (LES ZOPHES)』¹⁴

4歳から6歳まで向けの教材として、2017年度から導入されることになった新しい教材である。まず、ヴァレ州とフリブール州で導入され、次いで2018年度にヴォー州でも導入されるようになった。幼児期の段階では、宗教そのものを直接的に取り扱うことより、倫理的な問いを哲学させることが重視されている。そのことは教材の名称を付ける際にも意識されている(「フィロゾフ」の「ゾフ」)。具体的には、倫理的な問いを深く考えるという知的活動に誘うための、次のような10個の問い(テーマ)が用意されている。「(友情; AMITIÉ) 友情とは何ですか?」、「(怒り; COLÈRE) 人の怒りはなぜ起こるの?」、「(違い; DIFFÉRENCES) 私たちはどこか違うの?」、「(喜び; JOIE) 何がおきると嬉しいの?」、「(意地悪; MÉCHANCETÉ) いじわるは何が原因? どうして人はいじわるをするの?」、「(死; MORT) 死とは何なの?」、「(許可する/許可しない; PERMIS/PAS PERMIS) 何故やりたいたいことが全部できないの?」、「(恐れ; PEUR) 何を恐れるの?」、「(秘密; SECRET) 秘密は何のため?」、「(真実/嘘; VÉRITÉ/MENSONGE) いつも本当のことを言わないといけな

いの?」。幼稚園ではこのように、宗教そのものの学習というより倫理的な問いを哲学的に探究することを通して、やがて後の学年段階に上がってから行われる「倫理と宗教文化」への準備教育をしていると言えよう。教師は、各テーマに応じた10種類の特大パネル絵を園児らに提示しながら、様々な問いを投げかける。特大パネル絵に文字は一切なくテーマに関連した絵だけが描かれている。文字がほとんど使われていないため、どの言語圏でも使えるような教材になっている。さらに言えば、この教材は「倫理と宗教文化」に関する教材用としてだけでなく、言語をよく話せるようになるための、討論をするときなどの語彙にも関係してくるので、「フランス語」の時間などでの使用も推奨されているという。

②『色とりどりの世界 (Un monde en couleurs)』 1、2¹⁵

6歳から8歳までの教材として、「スイス PER」導入以前からヴォー州をはじめいくつかのスイスフランス語圏で使われてきた教材である。2000年代初頭に作成されたこの教材ではまず、一神教の主な三つの宗教、すなわちユダヤ教、キリスト教、イスラム教に関して、その基本的な特徴が取り上げられている。そして、これら三つの宗教のうち、とくにキリスト教の聖典である聖書の物語について発見する機会が提供されている。とくに、小学校低学年にあたる年齢段階のため、この時期の教材は宗教に関する知識や語彙を増やすことよりも、有名な物語を通して学習することになっている。出版当時はまだ「スイス PER」は導入されていなかったものの、すでに「共に暮らす (Vivre ensemble)」の価値観は編集方針にも取り入れられており、教材の後半には「お互いを尊重する勇気をもつ」、「責任感をもつ」などのテーマも用意されており、多文化共生を意識しつつ、児童が多様な価値観にも触れられるような構成になっている。とはいえ、ますます様々な宗教をもつ人々との共存が求められる時代になった今日からみると、やはりキリスト教を中心に据えた構成となっていると言わざるを得ず、他方、スイスに暮らす人々にとっては、キリスト教がスイスの文化、とりわけ美術や建築などに対する理解を深めるための一般教養としての側面を有しており、それらを文化の一部として教える必要性も認識されており、これらを踏まえて改良すべき時期にきているとの認識が出版社の側にもみられた。

2) 「サイクル2 (8歳から12歳まで)」

①『時間が経つにつれて (Au fil du temps, volumes)』 1、2¹⁶

②『スイスの宗教 (Les religions en Suisse)』¹⁷

③『世界の始まり (Aux origines du monde)』¹⁸

8歳から12歳まで用の主な教材には例えば上記の三種類が用意されている。『色とりどりの世界』に引き続き、『時間が経つにつれて』や『スイスの宗教』では、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の伝統的な三大宗教について、この時期はそこから更に少しずつ、キリスト教の中の三つの宗派（カトリック、プロテスタント、ギリシア正教）や他の宗教（仏教、ヒンドゥー教など）、さらには不可知論者や無神論者などについても取り上げられるようになっていき、宗教に対する様々な態度を区別することができるようになっていく。ダビデ、イエス、ムハンマド、モーゼ、ゴータマシッターラダなど各宗教の偉大な人物が文学的および社会歴史的な文脈に焦点をあてられながら紹介されたり、世界中の様々な宗教的信条と慣習（信仰、儀式、秘跡、慣行、祝祭）などが扱われたりしている。この段階になると読むことも多くなっていく。

また、『世界の始まり』では、この世界がどこからやってきたかということテーマとし、まずは世界の始まりについて科学的にどこまで解明されているかといった点から学習する。具体的には、宇宙の誕生の主要な謎や生命の出現などについて、科学者が研究を通して明らかにする方法について学ぶ。次いで、神話の中ではどのように世界が創生されたかが描かれる。具体的には、聖書における世界創造の物語、一創世記神話—について学習する。合わせて、この物語が歴史と文化を形づくり、世界の見方や生命の意味、地球上における人間の位置を示してきたことにも触れられる。最後に、世界中の様々な宗教的伝説が提示される。これらの伝説は世界がどのように出現したか、世界が何であるかを児童生徒らに考えさせるきっかけを提供する。児童生徒らはこれらの伝説が示す世界の起源を理解するとともに、これらの伝説によって提起される倫理的および実存的問題について議論する。例えば、「世界の始まり」というテーマについて、様々な国でそれがどのように語られているかということから、「生命というものは暴力なしでも存在し得るか」といった哲学的な問いに至るまで、児童生徒らが意見交換をする。

3) 「サイクル3 (12歳から15歳まで)」

- ① 『建築と宗教 (Architecture et religion)』¹⁹
- ② 『聖なる芸術の素晴らしさ (Merveilles de l'art sacré)』²⁰
- ③ 『宗教の惑星-世界を理解する鍵- (Planète religions – des clés pour comprendre le monde)』²¹

12歳から15歳まで用の主な教材には例えば上記の二種類が用意されている。この段階になってくると美術、音楽芸術に宗教がどのように関わっているかといった点の学習が充実

してくる。例えば、『建築と宗教』では、建造物を題材として、宗教文化について学ぶための教材が用意され、現代の子どもたちは旅行に出かける機会も少なくないため、ここで学習した内容を踏まえて、実際にそれらの建造物などを眺めたりする。具体的には、パリのノートルダム大聖堂、プラハの旧新シナゴグ、トルコのセリミエモスク、インドのブリハディーシュヴァラ寺院、カンボジアのアンコールワット寺院、アテネのパルテノン神殿など、宗教建築の6つの主要なモニュメントが紹介されているほか、宗教的建造物の研究を促進するワークシートが添付されている。児童生徒が大聖堂、シナゴグ、モスク、ヒンドゥー寺院、仏教寺院、ギリシア神殿などを旅行先で発見したとき、そのワークシートに記録できるようになっている。

また、『聖なる芸術の素晴らしさ』では、宗教関連の芸術、工芸品などに関する題材として、シナゴグのステンドグラス、栄光のキリスト、十字架の木枠窓、カーバ神殿の描かれた陶器、スーラの書道（カリグラフィ）、シヴァの彫像、仏足石、エジプトのパピルス、アテナのレリーフ、イースター島のモアイ像など、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、仏教、ヒンドゥー教、古代、民族等の宗教的シンボルの説明について紹介されている。この教材にもワークシートが添付されており、観察をしたり、情報を収集したり、得た情報を統合したり、知識を習得したりするのに有効なものとなっている。この段階では物語を通してではなく、実在する作品について探究する問いが用意されており、児童生徒は美術館に行って見聞するなどの活動が促進されている。

さらに、『宗教の惑星-世界を理解する鍵-』は「スイス PER」導入後に開発された比較的新しい教材であり、宗教学の専門家や各宗教の聖職者たちと相談しながら5、6年かけて作成された力作だという。教材には付録として、スイスフランス語圏では子どもにもよく知られている教育番組のDVDのほか、宗教の専門用語について解説されている「語彙集」もセットとして添付されている。「語彙集」は単なる用語の意味を知るためではなく、宗教についての過去と現在の状況について示すために用いられる。この教材では5つの宗教（キリスト教、イスラム教、ユダヤ教、ヒンドゥー教、仏教）が取り上げられている。具体的には、5つの宗教について、①歴史的観点、②地理的観点、③信仰と信仰の実践といった3つのカテゴリーに分類して、それぞれの特徴が同じ分量ずつ紹介されている。

「宗教とは何か」という問いから始まり、国と宗教の関係、「宗教を持たない人たちはどういう人たちなのか」といった問題など、広い視野でそれらが取り扱われていく。さらに言えば、宗教は時として暴走してしまったり、悪用されてしまったりすることも少なくないと

いう現実についても考えさせるようになっている。また、宗教の自由についても触れられ、その過程において極端な新興宗教にも言及されているが、この辺りの内容は非常にデリケートな問題も絡んでいるため、作成にあたっては苦勞したという。

以上、見てきたような「倫理と宗教文化」に関する目的や内容および教材等の概要を踏まえながら、また、アゴラ出版への聞き取りやヴォー州、フリブール州、ヴァレ州を中心とした幼小中高への学校訪問などを通して明らかになった事柄についても依拠しながら、最後にスイス PER における「倫理と宗教文化」教育の現状と課題について考察する。

3、「スイス PER」における「倫理と宗教文化」教育の現状と課題

第一に、「スイス PER」で今日推奨されている「倫理と宗教文化」教育は、「信仰」を深めることを目的とする護教的な宗教教育とは根本的に異なるものであることが明確になった。「倫理と宗教文化」教育の目指すところは、児童生徒らに多様な宗教文化の知識を提供しながら、児童生徒の誰もが自分の「起源」を見つけられ、より複雑な間文化的および宗教的対話の文脈に自らの身を置き、実存的な問いに向き合えるようにすることであった。そのため、「倫理と宗教文化」の時間は、事実に基づく知識と情報の場であり、伝説や物語などの「宗教的事実」についても、それらはこれまで語り継がれてきたという「歴史的、文化的な性質」をもつものとして扱われていた。それは「認識論的アプローチ」、「観察」に基づく学習であり、特定の宗教や宗派を布教することや宗教的教義を教えつけることに対しては断固として拒否するような学習の場であった。他方で、「倫理と宗教文化」の時間は、科学的、客観的に証明し得る限りの事柄や知見のみを提供するだけの場ではなく、伝説や物語も含めて思慮深く考えながら学習する余地を残しながら提供される一面も有しており、児童生徒らが良心の自由をもって、自分自身の諸価値を知り、それらの価値のもつ意義について省察し、自分自身の倫理的価値を構築するとともに、他者の価値と信念を発見し尊重したり、倫理的責任感を発達させたりすることを学ぶ場でもあった。

このように、「倫理と宗教文化」教育は、その科目名に「文化」がつけられていることにはあらわれている通り、宗教ではなく、宗教について (sur) というニュアンスを色濃く持つものであることが確認された。アゴラ出版社へのインタビューの中でも、世界を理解するためには歴史や地理のように宗教もひとつの教養であり、文化であるということを理解してもらいたい、宗教も歴史や地理や科学のようなひとつの学問、科学の分野として重要なものだという子どもたちにも伝えていきたいということを述べていた。

第二に、州の裁量にゆだねられている「倫理と宗教文化」の実施に関して、インタビューおよび訪問調査から各州の具体的な取り組み状況が明らかとなった。スイスフランス語圏において、その実施状況に関して 2017 年の段階では、ジュネーヴ州とヌーシャテル州は、「倫理と宗教文化」に関する教育について、時間割の中に教科としては導入されておらず、本稿で明らかとなった教材などについても使用されていなかった。今後は両州においても実施されていくようであるが、基本的には「歴史」の中で扱うことになっており、新たに「倫理と宗教文化」に関する時間枠を付け加える予定はなく、したがって、今後、教材が導入されたとしてもあまり多くの時間を割いて深い内容まで行うことはないのではないかと予測されていた。他方、フリブール州とヴァレ州はカトリック教徒の多い地域だったこともあってか、古くから宗教教育に関する実績を重ねてきており、「倫理と宗教文化」に関する教育についても早くから着手してきた。地理や歴史とは別に、宗教に関する時間が 1 週間に 2 時間、設けられており、とくにフリブール州に関しては、そのうち 1 時間は宗教を宗教として教える時間、すなわち各家庭の信仰する宗教・宗派の聖職者が信仰のための説教を行う時間として行われ、さらに別の 1 時間で「倫理と宗教文化」の時間（一般教養、文化としての宗教を教える時間）が行われていた。そのため、フリブール州では教材に関しても非常に深いところまで扱うことが可能となっていた。ヴォー州は「倫理と宗教文化」に関する時間を近年、1 週間に 1 時間、新たに設けるようになったところであった。このように「倫理と宗教文化」にかかる時間における各州の現状は上記の通りとなっていた。

第三に、現場における「倫理と宗教文化」の実践をめぐるのは、教養、文化的なスタンスでのアプローチであったとしても、学校あるいは教師間での取扱い方に差が生じていることが明らかとなった。「倫理と宗教文化」を公立学校において実施するというのはフランスほどではないにせよ、スイスにとっても非常にデリケートな問題と捉えられており、現場の教師たちの中にはどのように実施すべきか戸惑い、導入に消極的なものも少なくないという。そこで、現在、教師へのサポート体制としての教材開発に力が注がれており、アゴラ出版でも現在、インターネットでのサポート体制を充実させているところである。本稿でみた教材のうち、最新の出版物に関してはいずれも Web 上でより多くの、多様な補助教材や関連資料、実践例の紹介や発問例などを提供しており、それらを随時、更新する形で教師の授業づくりをサポートするシステムを構築している²²。とはいえ、「倫理と宗教文化」の授業実践にあたっては、教師の意識や技能含め、質によって大きく左右されるものであり、今日、担当者の人生経験や哲学的な訓練の欠如が指摘されるなど、別の課題があることも明らか

となった。

第四に、「倫理と宗教文化」の担当者について、必ずしも宗教を専門とする教師が担当するとは限らない現状が明らかとなった。例えば、ヴォー州の場合、中学校における「倫理と宗教文化」の時間は、養成系で「宗教」ではなく「歴史」を専攻した者が担当することが多いという。養成校の教員の話によれば、本来は「宗教」を専攻した者が担当することが理想であるが、「宗教」を専攻した者は「倫理と宗教文化」しか担当できないため、採用されにくく、他方、「歴史」を専攻した者は「歴史」と「倫理と宗教文化」の両方を担当することができるため、採用されやすい傾向にあるという。そのため、結果として「倫理と宗教文化」のような科目は宗教の専門的知見を必ずしも有していない者が担当したり、あるいは、専門的知見を有していないからということで、むしろ宗教を扱わなかったりといった問題が起こっているという。

おわりに

以上、本稿では「スイス PER」における「倫理と宗教文化」教育の現状と課題について考察してきた。これまでスイスの価値教育に関しては詳細が解明されてきたとは言い難い。それははじめにも述べたごとく、スイスでは州や学校の裁量権が大きく、全容の把握が困難であることに起因するものと思われる。本稿ではそうした事情も踏まえつつ、教育行政、教員養成校、教科書出版社、各学校関係者等へのインタビューや訪問調査といったアプローチをとりながら、とくに今日推進されている教育改革の中でも州の裁量にゆだねられている「倫理と宗教文化」教育についてその一端を明らかにしてきた。なお、今回は十分に論じることができなかったが、スイスにおいても、クラスの実情として、宗派間の対立や緊張関係のあることもうかがわれた。こうした生徒指導や学級経営にも絡んだ対応などについても詳細に見ていくことを今後の課題としたい。

註

¹ Audrey Osler and Hugh Starkey, Education for Cosmopolitan Citizenship : A framework for language learning, *Argentinian Journal of Applied Linguistics* Vol.3,No2,2015.

² 中央教育審議会「道德に係る教育課程の改善等について（答申）」2014年 p13.

³ 嶺井明子編著、『世界のシティズンシップ教育 グローバル時代の国民/市民形成』東信堂刊,2007年.

⁴ スイスの価値教育については、福田弘の研究などがあるが、近年の教育改革の動向以前のものであり、チューリッヒなどドイツ語圏を対象としたものである。

⁵ 藤井穂高「義務教育という幼児教育の保証形態—北アイルランドとスイスの2種類の比較検討—」『教育制度学研究』(21)2014年 pp.145-150./荒川麻里「スイス連邦における憲法教育条項の改正と州間協定の現状—オプヴァルデン準州の態度保留理由に着目して—」『教育制度研究紀要』(9)2014年 pp.55-66./河崎智恵、吉村雅仁「フランス語圏スイスの教育大学における多様性の取組—ヴォー州教育大学の事例を中心に—」奈良教育大学教職大学院研究紀要『学校教育実践研究』10巻、2018年、pp.97-103.

⁶ 拙稿「「思考力」「判断力」「表現力」を育てる道德教育に関する一考察—スイスの市民教育用教材及び教師用指導書から—」『倫理道德教育研究』、特別号、2016年、pp.12-29においても、「市民性への教育」について論じたものであり、「倫理と宗教文化」教育の動向までは解明されていない。

⁷ アゴラ出版へのインタビュー調査（2017年9月6日）

⁸ ヴォー州、フリブール州、ヴァレ州の各学校への訪問調査（2017年9月6日-7日および2018年9月3日-6日）

⁹ スイスの義務教育期間は原則9年であったが、「HarmoS 協定」以降、2年制の幼稚園を加え11年に移行している。サイクルの区分に関しては州によって柔軟に対応することが許されている。用語の説明に関しては、(<http://www.plandetudes.ch/web/guest/pg2-lexique>) 参照。

¹⁰ 認識論的ないし教授法的に共通する要素の周辺で、幾つかの構成原理でカリキュラムを再編成したもの。領域の区分は、国際教育や「HarmoS 協定」の動きを考慮して決める。なお、「ラテン語」、「倫理と宗教文化」、「家政」、これら三つの領域については州の裁量にゆだねられている。 (https://www.plandetudes.ch/web/guest/SHS_15/)

¹¹ 2017年の聞き取り調査の時点

¹² https://www.plandetudes.ch/web/guest/SHS_15/

¹³ ここで言及されているヒューマニストとは、哲学的思考あるいは非宗教的知恵を指すものとして使用されている旨、注釈が付されている。

¹⁴ *LES ZOPHES.*,Ed.AGOLA, Lausanne,2017.

¹⁵ *Un monde en couleurs*, volumes 1 et 2, Ed. ENBIRO, Lausanne, 2005.

¹⁶ *Au fil du temps*, volumes 1 et 2, éditions ENBIRO, Lausanne, 2006

¹⁷ *Les religions en Suisse*, éditions ENBIRO, Lausanne, 2008.

¹⁸ *Aux origines du monde*, éditions ENBIRO, Lausanne, 2009.

¹⁹ *Architecture et religion*, Ed. ENBIRO, Lausanne, 2005

²⁰ *Merveilles de l'art sacré*, Ed. ENBIRO, Lausanne, 2004

²¹ *Planète religions – des clés pour comprendre le monde: livre de l'élève*, Ed.AGOLA, Lausanne,2016年.

²² テキストを購入すると、ログイン用のナンバーをもらって閲覧することができる。

本研究は、JSPS 科研費 JP17K04843 「スイス PER における価値教育に関する研究—倫理・宗教文化・市民性への教育を中心に—」の助成を受けたものである。